



Title	例会企画：デザイン史研究と教育 3（工芸編）
Author(s)	高安，啓介
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 84-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103725
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

例会企画

デザイン史研究と教育 3（工芸編）

2025 年 5 月 17 日（土）14:30-16:30

近畿大学東大阪キャンパス 33 号館

現在の日本では、工芸分野への関心が高まっているものの、工芸の後継者だけでなく、工芸の研究者（理解者）の減少も気になければならなくなっている。そこで、今回はシリーズ 3 回目として、将来のデザイナーが知っておきたい工芸の知識や、若い世代への工芸の歴史の伝えかたや、工芸研究の魅力について意見交換をおこなった。

- ・ 主旨説明
- ・ 工芸：前崎信也（京都女子大学）
- ・ 漆芸：下出茉莉（大手前大学）
- ・ 染織：上田香（神戸大学）
- ・ コメント：宮川智美（京都国立近代美術館）
- ・ 意見交換
- ・ ガイド『デザイン研究入門』の企画について

意匠学会では、建築史・工芸史・服飾史などを含む、広い意味での「デザイン研究入門」の出版計画を進めているところである。そこで、本企画をととして今後の研究テーマとなりうる視点を取り出そうとした。上記の発表者の取り組みの紹介や、相互の意見交換をととして、次のような課題が浮かびあがった。

- ・ 現代生活から工芸史を考える
- ・ 作家中心の工芸理解の相対化
- ・ 工芸と工業と中間から考える
- ・ 工芸ビジネスの歴史と新展開
- ・ 持続可能性を意識した工芸史
- ・ 美術館での工芸展のありかた

工芸の伝えかた

前崎信也（京都女子大学）

「工芸」という分野が衰退した理由に、近代以降に作りあげられてきた手工芸産業の権威付けのためのストーリーが現代社会に合わなくなったことがある。私たちが今、未来に工芸的なものを生き残らせようとするならば、既存の歴史や枠組みの権威を主張するような活動ではなく、現代の日本人が共感できる新しいストーリーを編纂する必要がある。

一見時代遅れに見える「工芸」の中にも、視点や立場を変えれば、まだ十分に使える価値はのこっている。例えば、伝統的な文様の使い方や、素材が持つ制約の中で機能を最適化する手法には、現代のデザインやアートに関わる人間が知るべき知識が多分に含まれていると言えるだろう。さらに、これからの工芸の教え方に不可欠なのは、他分野との関係性を問うことである。地域コミュニティ形成に地場産業としての工芸ができること、現代人の副業としての工芸の可能性、工芸から発展した先端科学技術を有する企業とのコラボレーション、建築素材としての工芸の展開など、現代の地域や社会の課題解決のために工芸ができることを伝え広めることこそ、今の私たちに求められている仕事だと言える。

漆工の伝えかた

下出茉莉（大手前大学）

日本の漆工芸は、金や銀をふんだんに使用した加飾技法である「蒔絵」を中心に発展してきた歴史がある。希少な材料を用いたことから、蒔絵の施された漆器の需要者は各時代の権力者のごく一部に限られ、技術と意匠双方において各時代際立った展開を見せてきた。そこに現れる技術や意匠は、需要者の教養や美意識と深く結びついたものであり、制作当時のあらゆる文化的要素を内包している。これらを包括的に理解することは、日本人が培ってきた美意識やものづくりのノウハウを知ることであり、これからの工芸の在り方を検討していく上での基盤になるものである。学問的な立場からは、現在までの歴史的な流れを十分に認識するとともに、これらの延長線上に今があるという視点をもつこと自体の重要性を伝えていくことも不可欠である。

今回、若い世代に伝えるための「漆工史入門」というテーマでお話をいただいたため、日本の漆工芸の基礎的な通史と大学生等の若い世代にどのように漆工芸を伝えるのかという視点から報告を行った。歴史研究自体の重要性を伝えること、また将来的に活性化につながるような工芸分野の新たな学問体系を構築していくことが重要になると考えている。

染織の伝えかた

上田香（神戸大学）

染織技術は、日本の文化や風土の中で独自の発展を遂げてきた。工芸史としての染織は、その歴史の変遷や技術的特徴を明らかにし、後世に伝えるという重要な役割を担っている。各時代に見られる文様や技法を通して、染織が単なる装飾にとどまらず、教養や社会的背景と深く関わってきたことを理解することは重要である。また、自然素材の活用や地域に根ざした分業体制には、現代のサステナビリティにも通じる知が宿っている。染織を学ぶことは、先人の知恵と現代をつなぐ歴史的理解を深める手がかかるとなる。

一方で、染織は工芸と工業の中間に位置する領域として、あらためて評価されるべきである。伝統的な手仕事に加え、近代以降の技術革新や機械導入を受け入れながら進化してきた染織の実態は、「工芸か工業か」といった二項対立では捉えきれない。こうした中間的視点から工芸を再考することこそが、今後の工芸の価値と可能性を広げる鍵となるだろう。

美術館からのコメント

宮川智美（京都国立近代美術館）

工芸史は多くの場合、まず素材に分類し、技術の発展が歴史になる。一方、作家の変遷という歴史の場合、同時に作家の立場を表す枠組みも意識される。明治工芸、帝展（日展）や民藝、伝統工芸など、美術としての工芸を論じる枠組みがいかに形成されたのか。先行研究を踏まえれば、これも通史になりそうだが、方向的に進展したというより、多様な価値観が保持され続けている。

このほか日本の生活文化において、例えば茶の湯の取り合わせのように、必ずしも近代以降の美術概念を前提とせず、工芸の芸術性を考えることもできる。器物や注文制作などに創造性を認めない議論は、すでに過去のものだろう。ただし工芸作品を見る側は、こうした生活に根差した文化的背景を、もはや共有していない。現代生活との接点は、もっと別のところに生まれている。

これまで、工芸とは何かを理解しようとして、分類し、体系化して隣接分野との境界を探ってきた。むしろその領域横断的な特性が、現代においては幅広い論点を許容する工芸研究の魅力になり得ると考えたい。近代美術館が工芸を展示することは、美術や美術史の枠組みを超えて優れた表現を取り上げていくうえで、重要な観点になっている。

司会のコメント

高安啓介（大阪大学）

工芸に少し興味を持ち始めた人々をさらに工芸研究へと導いて、工芸の良き理解者を育て上げるために、従来の歴史研究に生氣を吹き込みたい。学問の厳正さを失わない程度に、現代の関心を持ち込んで、生活の実感がともなうようにする工夫がもとめられる。大学教員や、研究従事者は、自分の知っている知識を伝えるだけでなく、何がまだ知られていなくて知る価値のある事柄かを見定めて、次の世代に伝えることも必要である。引き続き、会員どうしの意見交換をととして、研究のアイデアを掘り起こしていきたい。